

モンテッソーリのリズム運動について

—— E. B. バーネットのリズム曲集を中心に ——

菊 池 由美子

はじめに

モンテッソーリの研究会では、モンテッソーリ・メソッドを実践している幼稚園や保育園などの先生方が多数集まり、大変熱心に講演や実技指導を繰り広げられている場面に出会う。今までにモンテッソーリにおける音楽教育を取り上げてきた。新幼稚園教育要領との比較⁽¹⁾や実践園における観察⁽²⁾などを試みてきたが、研修会に参加して改めて、モンテッソーリの教育に賛同し、実践している方々が多いことを再認識する次第である。

さて、音楽教育について考えてみると、モンテッソーリの場合は、音楽教育の目的としてリズム運動・楽器の演奏・楽譜の読み書きをあげている。その中で、楽器の演奏と楽譜の読み書きについては、感覚教具の雑音筒や音感ベルで入念に取り扱われているが、リズム運動については特定の感覚教具は用意されておらず、具体的な指導方法は見当らない。しかし、モンテッソーリの協力者であったE. B. バーネットが考案した「モンテッソーリ音楽 3才～8才の子供のためのリズム曲集」⁽³⁾という本が出版されており、モンテッソーリの教育に基づいたリズム運動の指導内容が紹介されている。そこで本稿においてモンテッソーリがリズム運動をどのように考え、そして子どもたちに経験させようとしたのかをバーネットのリズム曲集も含めて考察してみたい。

1 リズム運動の意義

モンテッソーリの教育の目的は、人格の形成と理想社会の建設である⁽⁴⁾。一般に人間形成の主な要因は、両親から受け継いだ遺伝的形質、教育を含む家庭および社会環境の影響、自らの意識的、自覚的な学習および本人の努力と言わ

れている。モンテッソーリは、人間は生まれながら持ち備えている生命力の働きで成長発達するが、それを助けるのは教育であり、その教育は整備された環境の提供によって自ら吸収し、独立能力、自主能力を身につけることにより人格が形成すると考え、環境の構成と自己発展の助成の必要性を主張した⁽⁵⁾。

誕生したばかりの子どもは、身体における随意筋の運動、精神における言語、自分のまわりの事物についての知識すべて皆無である。身体的各器官は整っているがその働きはまだできていないために、身体を自分の意志のままに動くようにならなければならない。そこでモンテッソーリは、感覚器官—脳—筋肉を結ぶ神経組織を発達させなければならないと考えた⁽⁶⁾。この神経組織は、環境からの刺激を感覚器官が受け取って脳に伝え、脳が知覚し、判断してそれに適応する行動を運動神経によって筋肉が伝達し、終わりに運動が起こるという経路をたどっているからである⁽⁷⁾。また、幼児期は著しい身体的発達とともに精神的発達もする時期であり、身体と精神の両方の発達を導くことが必要であること⁽⁸⁾に気が付いたモンテッソーリは、感覚教育、筋肉運動教育、言語教育に主眼をおいた⁽⁹⁾。そして、望ましい環境と自己発展の助成を持ち備えたモンテッソーリ独自の教具を考案したのである。この教具によって感覚教育と言語教育はなされているが、筋肉運動教育については環境を整えることによってなされる⁽¹⁰⁾として、教具は特に用意されていない。

人間の運動は大きく2種類に分けることができるという⁽¹¹⁾。手を使う精神的運動能力と身体的上達に関する筋肉運動能力である。手がうまく働くためには姿勢を継続し、身体を移動させてくれる足が働いてくれなければならない、手を使うと言うことは足を使うこと、すなわち大き

な筋肉運動がよくできることが前提となる。モンテッソーリはこの筋肉運動教育によって、子どもの運動に秩序をあたえ、彼らがめざしている動作へと導いてあげることが目的としている。

モンテッソーリは、筋肉運動に関連ある内容として、日常生活の基本的運動（歩行、起立、着座、物体の取り扱い）、身づくろい、園芸、手仕事、体操、リズム運動をあげている⁽¹²⁾。人間が生活していく上で身につけなければならない事柄、そして子どもにとって一番身近な環境を利用することから考えると、日常生活という環境はまさに理にかなったものであろう。従って、筋肉運動教育については、モンテッソーリの日常生活の練習というプログラムに従うことにより環境が整えられ、身の回りのものを使って行なうことが出来る。次の感覚教育では、感覚教具を使って、それぞれの感覚器官を発達させる直接目的の他に、必ず関連性のある間接目的がある。これらの中には、筋肉運動はもちろんのこと、手を使う精神的運動がふんだんに盛り込まれていることがうかがえる。

一般にリズム運動というと、音楽的要素を中心としたリズム教育を連想するが、モンテッソーリの場合は音楽的観点というよりも筋肉運動の観点から出発している。これは、音楽をおろそかに扱っているのではなく、筋肉運動をなくしてはいかなる動作もままならないということを示唆しているに他ならない。

モンテッソーリのリズム運動の始まりは、日常生活の練習の中にある線上歩行練習に見出される。ここでは、平衡感覚と正しい姿勢、協応動作と集中力、身体のコントロールなどが主な目的であるが⁽¹³⁾、その際に線上歩行練習がより行ないやすいような、また伴奏を付けて励ますような簡単なマーチが適しているとしている⁽¹⁴⁾。歩行にあわせて音楽を流すのが最初の導入で、次はピアノの音にあわせて線上歩行を行なうことによりリズム運動を引き起こしている。そして、同じ曲を何日か繰り返して行なうことにより、子どもたちはリズムを感じ始め、今度はそれに合わせて手や足を動かすようになり、また歌を歌いながら歩くようになる。このようにし

て、少しずつ音楽が理解されるようになることをねらいとしている。

しかし、リズム運動についての具体的なリズムの提示はない。その理由として、四つ考えられる。一つは、基礎を重んじ、基礎さえしっかりと築きあげていれば後は大丈夫であるという自信と考える。この場合、敏感期を利用した筋肉運動に重点を置いているということである。二つは、独特の教具やその提供方法などに固執するあまり論述されている事のみがモンテッソーリ・メソッドのすべてと考えられがちな事である。モンテッソーリ・メソッドに掲げられていること以外にも子どもたちがなすべき生活、すなわち保育内容が必ずあるということである⁽¹⁵⁾。三つは、さまざまな環境にある教育現場に対応できうる柔軟性を含んでいるのではないかと言うことである。重要な基礎部分はモンテッソーリのプログラムにそった提供を必要とするが、応用段階はそれぞれの園の特徴を生かして行なえるような配慮と推察する。四つは、音楽という分野がモンテッソーリにとって自分の専門分野外であったことは確かであり、応用段階におけるさまざまなリズム運動の実践例を提示出来なかったのは否めない事実と考える。なぜならば、E. B. バーネットが子どもたちのためにピアノを弾いているのをみて、モンテッソーリは自分の教育原理に従って音楽を教える方法を一緒に考え、そしてその音楽教育法についての講座を開くためにバーネットを講師として招待したと言う事実があるからである⁽¹⁶⁾。

以上の理由から、リズム運動の具体的な論述が少ないのではないかと考えたが、モンテッソーリが専門分野外ということだけで音楽を軽視したと判断するのではない。音楽の基礎理論に関しては、雑音筒や音感ベルという教具で十分といえるほど取り入れられている。

2 バーネットのリズム曲集

モンテッソーリは、音楽の初歩として前述した線上歩行練習の中にリズム運動を取り入れ、もう一つ静粛練習の中に聴覚訓練を取り入れている。このことからモンテッソーリのよき協力

者となったバーネットは、音楽を聞くことは音楽を作るために必要な準備であり、歌うことは体の動きと音楽のリズムのバランスによって理解したあとにのみできることであり、リズムは体験されなければならないと考えた⁽¹⁷⁾。

バーネットは、子どもたちが幼児期に数多くのよい音楽に触れることが将来の音楽的成長の土台となることを信じて、リズム的特徴、表現の自発性、単純性を考慮し、各国のフォークメロディー（民謡）と偉大な作曲家の作品を抜粋して子どもの動きのためのリズム曲集を編集した。これが「モンテッソーリ音楽 3才～8才の子供のためのリズム曲集」である。ここに紹介されている曲は、子どもの動きに最も適している曲として選曲されているが、あくまでも選び方は個人的なものであり、音楽すべてを網羅しているものではないことを付している。フォークメロディーと偉大な作曲家の作品をとりあげたのは、モンテッソーリが母国ということを大切にしたこと、すでにローマにとどまらず世界各国でモンテッソーリ・メソッドが普及しはじめており、国際的に考えられたこと、本物の良さを備えた音楽を聞かせることという観点からと推察する。残念なことは、日本の曲が選ばれていないことである。

この曲集では、子どもが動くことが出来るリズムを九つあげ、三つのグループに分類している。

①自然な動き —— マーチ

ランニング

ギャロップ

スキップ

②調整された —— トロット

自然な動き スロー・ウォーク

スロー・マーチ

③ステップ・ —— ワルツ・ステップ

パターン ポルカ

バーネットは、さまざまな試みを経て、音楽を子どもたちに紹介するのは朝の時間が一番適していると言っている。子どもたちが作業を続けているときでも教師が雰囲気の変換の必要を感じたら、部屋の一部を片付けてピアノの前に

いって弾き始める。すると、何人かの子どもは何をしていてもそれをやめて、喜んで音楽に合わせて動き始め、他の何人かの子どもはしばらくの間注意深く周囲を見回してから音楽に合わせて動き始め、また他の何人かの子どもは音楽を聴くだけにとどまるだろうが決して参加するように促す必要はないとしている。子どもは、最初に音楽のリズムに対して興味を示すにもかかわらず、後でメロディーと各曲の音楽的特徴に気が付き、感じたことを動きで表現するようになる。

子どもたちに音楽を提供する時には、次のことに留意しなければならない。

- ・曲はフレーズ、強弱、テンポに細心の注意をもって演奏されなければならない。特に名曲については、作曲者が指示したテンポ、強弱、フレージング、調性に従うようにするべきであること。
- ・ピアノは子どもたちを見ることが出来る場所に置くこと。
- ・演奏中は子どもたちに話しかけないこと。
- ・歌うことと他の自由な身体表現を奨励すること。
- ・子どものステップは大人のステップより小さいので、大人のテンポより少し早いテンポにすること。
- ・大体8～12曲を含めて計画を立て、対照的な調、テンポ、リズムの曲をいれること。

①自然な動きでは、人間の生活に密着しているマーチ — 歩く、ランニング — 走るという基本的かつ単純なリズムとギャロップ、スキップという付点のリズムが取り上げられている。子どもの動くスピードに曲のテンポを合わせることを前提として、3歳半～4歳の子どもに紹介できる内容とされている。

マーチ（譜例1）は、Moderatoで4拍子系と2拍子系を中心とした拍打ちのリズムが多い。

ランニング（譜例2）は、Allegroで8分音符の刻みのリズムであるが、2拍子、4拍子にとられず8分の3拍子も取り入れられている。2拍子、4拍子に比較すると、3拍子というのはやや取りにくい拍子であるが、走るという普段

(譜例1) マーチ

MODERATO ♩ = about 132



MODERATO ♩ = 132



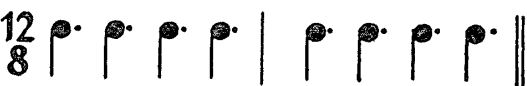
MODERATO ♩ = 132



MODERATO ♩ = 132



MODERATO ♩ = 132



(譜例2) ラニング

ALLEGRO ♩ = about 132



ALLEGRO ♩ = about 80



の動作の中に何気なく3拍子が入っている。

初めは、マーチとランニングという対照的なリズムを同時に提供した方が大変効果があり、子どもたちがスムーズに動けるようになるまでは同じ曲を繰り返して使うことが望ましい。ピアノを弾く場合、マーチはペダルをあまり多く使いすぎずに力強く元気よく、ランニングも同様にペダルをあまり使わずに軽快に弾くように指示されている。そして、各国の短いマーチ、有名な曲ではビゼーの「カルメン」、アルルの女」、グノーの「ファースト」、ヴェルディの「アイダ」、モーツァルトのトルコ行進曲、オッペンバックの「天国と地獄」などから抜粋された短い曲が紹介されている。子どもは繰り返し行なう

ことを好むために、休みなく曲を弾いたほうが効果的で、子どもたちが今までに演奏された曲のリズムを覚えてくると、異なったりリズムとテンポの曲が演奏されるのを楽しみにするようになり、教師が指示しなくても曲に合わせて体を動かすようになる。

ギャロップ(譜例3)は、付点のリズムに合わせて足を交互に動かしながら横方向へ進み、滑るか、跳ぶ動作である。Vivaceと言う速いテンポにのってステップをふみ、2拍子、3拍子、4拍子と幅広く展開される。ピアノはペダルをほとんど使わずにステップする音符にアクセントをおいて勢いよく弾き、指がギャロップしているようにスタッカートで弾くのが望ましい。ここでは、各国のフォークメロディーの他に、ヴェルディの「仮面舞踏会」やベートーヴェンの「フィデリオ」などの名曲が載っている。

(譜例3) ギャロップ

VIVACE ♩ = about 120



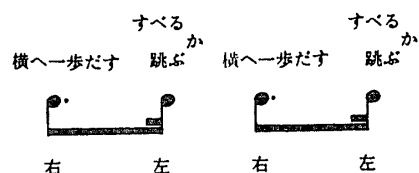
VIVACE ♩ = about 120



VIVACE ♩ = about 120



VIVACE ♩ = about 120



スキップ(譜例4)は、Allegroのテンポで8分の6拍子における4分音符と8分音符に分割されたリズムのみである。ギャロップとは異なり、同じ足で跳躍する動きでやや難しい動作を伴うため、5歳以下の子どもには難しい動きである。片方の足は跳んで、もう一方の足は膝を高く上げて、前に出すようにする。ピアノは、

ペダルをほとんど使わずに4分音符と8分音符を区別して弾くように書かれている。シュトラウスの「こうもり」などがあげられているが、この他にギャロップとスキップ、スキップとマーチなどが組み合わされている曲なども紹介されている。

(譜例4) スキップ

ALLEGRO $\text{♩} = \text{about } 112$

前に出す 跳ぶ 前に出す 跳ぶ 前に出す 跳ぶ 前に出す 跳ぶ

右 右 左 左 右 右 左 左

ギャロップとスキップのリズムは、タンタタという大変よく似たリズムである。一般的に考えてみると、ギャロップとスキップは動作が異なるだけで、リズムパターンは同じものを使っている例が多いように思われる。それを、ギャロップは付点音符で Vivace, スキップは8分の6拍子におけるの4分音符と8分音符の分割で Allegro というように、あえてテンポとリズムを区別している。これはバーネットが、ギャロップのところで、高く跳ぶために時間を取ることがあると記しているように、ステップをふむ時にそれぞれのステップの動作の違いから生じる微妙な間やテンポの違いを意識しているからである。これは、実践におけるきめ細かい観察と教育的熟慮の表れに他ならない。

②調整された自然の動きでは、トロット—ゆっくり走る、スロー・ウォーク—ゆっくり歩く、スロー・マーチ—ゆっくり行進するがあげられ、①自然な動きを経験した子どもたちが曲に合わせて体を動かせるようになると与えられるもので、4歳～5歳の子どもに適している。ここでは、音楽に合わせてステップをふむことが要求されており、①の時よりも少し難しくなっている。

トロット(譜例5)は、膝を高く上げてゆっくり走る動作である。ランニングに比べてテンポ

も Allegretto とやや遅めで、8分音符に限らず4分音符も使われている。また、子どもたちによって作られたバリエーションが三つ紹介されている。マリオネットステップ、ジャンピングステップ、ティップトップステップである。リズムに合わせて、体をかたくして操り人形のように歩いたり、手足を開閉しながらジャンプしたり、爪先でそっと歩く動きである。このバリエーションは、子どもたちによる自由な身体表現の産物と思われる。ピアノはペダルをあまり使わずに、スタッカート音符はあたかも指がトロットしているように非常に鋭く弾くように指示している。曲例は、バッハの「ミュゼット」などがある。

(譜例5) トロット

ALLEGRETTO $\text{♩} = \text{about } 152$

ALLEGRETTO $\text{♩} = \text{about } 152$

ALLEGRETTO $\text{♩} = \text{about } 152$

スロー・ウォーク(譜例6)は、腕や体を左右に動かしながらゆっくり歩いたり、または座って自由な体の動きで音楽を表現させるステップである。ここでは、8分の6拍子の拍打ちで Adagio という緩やかなテンポである。ピアノはペダルを使って歌をうたう気持ちで表情たつぷりに弾く。曲例は、各国の子守歌が多数取り上げられている他に、モーツァルトのソナタ K. 331

(譜例6) スロー・ウォーク

ADAGIO $\text{♩} = \text{about } 52$

などがある。

スロー・マーチ（譜例7）は、ゆっくり歩くことであるが、ただ単にゆっくり歩くのではない。音楽の荘厳な気分を味わいながらゆっくり歩くことであり、年長児に向いている内容である。Andante Maestoso というゆっくりなテンポで、2拍子、4拍子が中心であるが、2分の2拍子が表れるなど雰囲気が出ている。ピアノはよく響かせて、すべての拍にペダルを用いて弾くようにする。ヴェルディの「アイダ」などが紹介されている。

（譜例7）スロー・マーチ

ANDANTE MAESTOSO ♩ = about 58



ANDANTE MAESTOSO ♩ = about 58



ANDANTE MAESTOSO ♩ = about 58



子どもたちが上手にバランスをとることができるようになると、簡単なダンスのステップを試みることが出来るようになり、次第に次に出てくるワルツ・ステップやポルカのステップをふむことが出来るようになる。

③ステップ・パターンでは、3拍子というワルツ・ステップと、ワルツ・ステップとホップと言う二つのステップが組み合わされたポルカが取り扱われており、さらに難しくなってきた。

ワルツ・ステップ（譜例8）は、3拍子を刻むステップであり、Moderato という比較的ゆったりしたテンポである。初めは、前方へ進んでいくステップで2小節ワンパターンとなっている。小さい子どもにこのステップが難しい時は3拍子に合わせてバランス・ステップの練習することをすすめている。この場合、示されたテンポよりもゆっくりしたテンポで弾いた方がよ

い。メロディーは、レガートで歌をうたう感じで表情豊かに、伴奏は1拍目にアクセントを置き、少しペダルを使って弾くようにする。ここでは、各国のフォークメロディーが中心に紹介されている。

（譜例8）ワルツ・ステップ

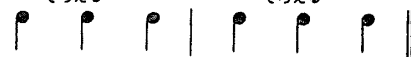
MODERATO ♩ = about 140



MODERATO ♩ = about 140



前に出す 一緒に そろえる 前に出す 前に出す 一緒に そろえる 前に出す



右 左 右 左 右 左

バランス・ステップ

前に出す 重心をおく 前に出す 前に出す 重心を置く 前に出す



右 左 右 左 右 左

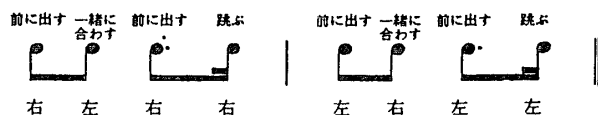
ポルカ（譜例9）は、ワルツとホップのステップの組合せである。ワルツのステップの3拍目にホップのステップが付け加えられたものではあるが、Allegro Vivace でとても速いテンポの上にワルツのように3拍子ではなく、2拍子、4拍子となって高度な動きである。今まで経験したステップに少し手を加えたただけだが、拍子やテンポが変わるということによって、何気な

（譜例9）ポルカ

ALLEGRO VIVACE ♩ = about 160



ALLEGRO VIVACE ♩ = about 160



右 左 右 右 左 右 左 左

いうちに色々なリズム、拍子が違和感なく体験することが出来る。ここではペダルをあまり使わずに勢いよく、元気に弾くように指示されている。

以上が、モンテッソーリ・メソッドに従って考えられたバーネットによるリズム運動の内容であるが、それと同じ頃に、やはり幼児期の音楽教育においてリズム教育が重要であると考えていた人物がいる。それは、リトミックで知られているE. J. ダルクローズである。両者共に筋肉運動という観点から出発していることや、リズム運動の内容が似通っていることはたいへん興味深いことである⁽¹⁸⁾。

3 リズム運動の実践

モンテッソーリ・メソッドを行なっている施設を見学してみると、必ずしもモンテッソーリの教具すべてを取り揃えているとは限らないのが実情のようだ。これには、モンテッソーリの教具の種類が膨大な数であること、子どもの数が多い施設では同じ教具を数セット必要とすること、そして教具が高価なことなどが背景にあるようである。施設によっては、教具にそった手作り教材で実践している場合も少なくない。また、モンテッソーリの教具のほとんどを取り揃えている施設でさえ、身近なものを取り入れた手作り教材を作り、工夫を凝らしている例がたくさんある。これらは、モンテッソーリの教具を用意しなければ、モンテッソーリ・メソッドが実践できないという批判は打ち消されるであろう。教具が準備されている部分でもさまざまな工夫がなされているとすると、教具が準備されていない部分では尚のこと多種多様な展開がはかられていると推察できる。

リズム運動の場合も同様のことが言える。モンテッソーリの教具が準備されていない分野であり、バーネットのリズム曲集によって内容がさらに深められたが、バーネット自身が出しているように音楽のすべてを網羅したものではないこと、あるいはこのリズム曲集を使っていない場合もあり得るわけで、実際の教育現場ではさまざまな工夫がなされていることは間違いない。

い。

以前に観察した幼稚園では、このリズム曲集は使用していなかった⁽¹⁹⁾。どのようなリズム運動を取り入れていたかという実態を把握するまでには至らなかったが、この曲集が考案された頃、日本ではモンテッソーリ・メソッドがあまり普及されていなかったことから日本の曲は紹介されておらず、やや馴染みが薄い部分があることは事実である。しかし、ここでなぜこのリズム曲集を使用していないかということを論究することよりも、このリズム曲集にこだわらずにその施設の特徴を生かしたリズム運動の提供方法を試案した方が得策であろう。

モンテッソーリ・メソッドに従えば、線上歩行練習によってリズム運動が引き起こされたことから、歩くという動作が初めとなり、音楽もそれにあったものが使われる。しかし、単なる筋肉運動にとどまらずに音楽的リズムへの転換を主たる目的とするならば、歌や劇などによるリズム体験も重要な位置を示すであろう。毎朝季節に関連ある曲を歌ったり、落ち着いた曲を流したり、行事を利用して劇遊びから音楽に親しみをもたせることも大切と考える。

リズムで言えば、歩く、走るというリズムが一番身近で馴染みやすい。バーネットは次のリズムとの関連を考慮して、3拍子も取り入れているが2拍子、4拍子を中心に行い、付点のリズムはスキップ、無理なときはギャロップで行うと良いだろう。リズムの微妙な違いについては、子どもたちのステップに合わせてピアノを弾くように心がければあまり支障をきたさないと考える。そして、奇数拍子の3拍子や3連符または8分に6拍子などが体験できたら申し分ない。あとは、テンポをかえたり、自由表現をいれたり、リズムを組み合わせたりすると変化がでてくる。このリズム運動と音感ベルとの内容に関連させていけたら音楽教育の目的はさらに深められることと推察する。

まとめ

モンテッソーリのリズム運動の目的は、音楽的要素よりも筋肉運動の一部という論理からき

ている。子どもに一番身近な日常生活という環境を利用した線上歩行練習に従って始まり、筋肉運動の発達に伴って、音楽的リズムの転換へと導いている。具体的なりズムの提供がないのは、さまざまな理由が考えられたが、これは単にモンテッソーリ・メソッドにこだわりすぎたせいかもしれない。すなわち、教具一つ一つに入念な提供方法があるために、すべてに関して提供方法が指示されなければならない錯覚に陥ってしまうことである。バーネットはモンテッソーリのリズム運動の内容を深めたとともに、それを示唆してくれたと考える。

実際の教育現場におけるリズム運動の実態を把握することやダルクローズのリトミックとの比較が今後の課題である。

注

- (1) 拙稿「モンテッソーリの音楽教育——新幼稚園教育要領との比較——」生活学園短期大学紀要第13号 1990年 p. 71～77 参照
- (2) 拙稿「モンテッソーリ・メソッドの音楽教育——実践例を通しての一考察——」盛岡大学短期大学部紀要第1巻 1991年 p. 33～37 参照
- (3) E. B. バーネット著 フランス・ボーン、桑村清子共訳「モンテッソーリ音楽 3才～8才の子供のためのリズム曲集」エンデルレ書店 1984年
- (4) 市丸成人、松本静子編著「モンテッソーリ教育の理論と実践」上巻 エンデルレ書店 1987年 p. 9
- (5) 同上書 p. 32～33
- (6) 同上書 p. 47～50
- (7) M. モンテッソーリ著 鼓常良訳「こどもの発見」国土社 1987年 p. 96
- (8) 前掲書 市丸、松本編著 p. 7
- (9) モンテッソーリは、この三つの教育を日常生活の練習、感覚教育、数教育、言語教育、文化教育の五分野に分けている。
- (10) M. モンテッソーリ著 平野智美、渡辺起世子訳「モンテッソーリ わたしのハンドブック」エンデルレ書店 1989年 p. 18
- (11) 杉浦太一他著「モンテッソーリからモンテッソーリを超えて」相川書房 1991年 p. 88
- (12) 前掲書 モンテッソーリ著 平野、渡辺訳 p. 20
- (13) シスター・クリスチナ・マリー・トリュドー著 渡辺和子監修「モンテッソーリの手びき」ノートルダム清心女子大学 1984年 p. 18～19
- (14) 前掲書 モンテッソーリ著 平野、渡辺訳 p. 27
- (15) 前掲書 市丸、松本編 p. 133
- (16) 前掲書 バーネット著 p. 3～4
- (17) 同上書 p. 5
- (18) エルザ・フィンドレイ著 小野進訳 板野平監修「ダルクローズ・リトミックによるリズムと動き」全音楽譜出版社 1983年 参照
- (19) 前掲拙稿「モンテッソーリ・メソッドによる音楽教育」参照